

文部科学省大学間連携共同教育推進事業

平成 27 年度 報告書



時代が求める新たな教養教育

目 次

ごあいさつ

京都府立大学	学長・副学長あいさつ、大学紹介	3
京都工芸繊維大学	学長・副学長あいさつ、大学紹介	4
京都府立医科大学	学長・副学長あいさつ、大学紹介	5
京都府知事あいさつ		6

はじめに

平成 27 年度取組の到達点	7
----------------	---

第 1 部 教養教育共同化の展開

(1) 平成 27 年度共同化授業の概要	13
(2) 共同化授業の受講状況	15
(3) 人・サル・植物の関係から知の源流と未来を探る ～リベラルアーツセンター主催 学生シンポジウム報告～	18
(4) 府民公開講座	25

第 2 部 時代が求める新たな教養教育像の探求

(1) 平成 27 年度のリベラルアーツセンターの活動を総括して	35
(2) 平成 27 年度の教育 IR センターの活動を総括して	38
(3) 共同化科目担当者会議	41
(4) 共同化科目の授業研究	
ア 「京の意匠」における展示の活用	42
イ 「京都の歴史」に理系の興味を	43
ウ 5 つの問いかけ、7 つの文芸作業－文芸創作論の教育実践について	44
エ リベラルアーツ・ゼミナールⅦ 感性の実践哲学	53
オ 吉野源三郎『君たちはどう生きるか』に学ぶ教養教育の原理像と思想性 ーリベラルアーツ・ゼミナール「社会科学の学び方」のティーチング・ポートフォリオー	55
カ 教養科目としての数学－射影幾何学を主題として－	62
キ 物理学の「言葉」を題材にした授業の試み ー目指すこと、試みたこと、反省することー	64
ク「物理学Ⅰ」昔と現在	67

(5) 共同化科目の学修成果の把握

ア 教養教育を受講した1回生の学習成果に関する間接評価指標 ー授業アンケートと大学IRコンソーシアムの調査票の活用ー	69
イ 単位制度の実質化に関するモニタリング指標 ー履修選好・学習時間・双方向性に関するIRー	73
ウ 「1年次生アンケート」を活用した教育改善	77

(6) 質保証に関する取組成果の発信と共有

ア 大学支援組織と連携したFDプログラムの共有 ー大学コンソーシアム京都・大学教育学会を事例としてー	79
イ 教養教育質保証フォーラム「現代における市民性とは何か」 ー日本学術会議の分野別参照基準を参考にしてー	83

(7) 「京都モデル」を目指して	87
------------------	----

第3部 ステークホルダーと協働した外部評価

(1) 平成27年度運営協議会開催概要と運営協議会委員による外部評価コメント	93
--	----

(2) 外部評価コメントへの回答

ア 総論	95
イ 教員アンケートに見る成績評価の質保証ー外部評価コメントへの回答としてー	96
ウ 自己評価実施要項「基準7 施設・設備及び学生支援」から見た 教養教育共同化施設と個別履修相談	104

資料編

京都三大学教養教育共同化による「新しい時代の要請に応じた教養教育」の実践	113
平成27年度三大学教養教育研究・推進機構 運営委員会 委員名簿	114
三大学教養教育共同化推進体制	115
教養教育共同化施設「稻盛記念会館」	116
会議の審議状況、視察・学会参加状況	118
平成27年度京都三大学教養教育共同化科目受講案内（抜粋）	123
京都三大学教養教育研究・推進機構 「授業アンケート」	133
京都三大学教養教育研究・推進機構 「1年次生アンケート」	134
京都工芸繊維大学の科目ナンバリングの導入に向けた進捗状況	136
京都工芸繊維大学「科目ナンバリング分類表」	138



京都府立大学

京都府立大学は、1895（明治28年）年に創立された京都府簡易農学校に源を発し、昨年、開学120周年を迎えました。人文・社会・自然の諸分野にまたがる3学部・大学院3研究科を備えた総合大学であり、京都府における知の拠点として、小規模の利点を生かした密度の高い教育、高度かつ地域社会と密接に連携した研究、府内各地域の様々な課題に応える地域貢献活動や公開講座などを積極的に展開しています。

平成26年度からは、全国初となる京都府立医科大学、京都工芸繊維大学との教養教育共同化がスタートし、同年9月には新たな文化・学術・環境を発信する「北山文化環境ゾーン」の一角に教養教育共同化施設（稲盛記念会館）が整備されました。この施設で三大学の学生が一堂に会して学ぶとともに、府民の皆様等との多様な交流が一層促進されています。



学長あいさつ

京都府立大学学長

築山 崇



3大学共同による教養教育の展開の取組が、文部科学省大学間連携共同教育推進事業の助成最終年度を28年度に迎えることとなりました。26年度には、専用施設も竣工し教育・学習条件が飛躍的に向上すると同時に、科目の充実や教育の質向上に向けた研究、学生の自主企画による研究プロジェクトなど、内容面でも大きな進展が見られました。事業スタートの24年度には、授業スケジュール（学年歴）、受講登録、試験や評価方法など3大学それぞれで異なる制度・システムの調整での苦労もありましたが、国立と公立、単科大学と総合大学など設置形態も異にする大学間の連携共同で、前例のない教養教育の新しいかたち、京都モデルを構築、発信するという目標にあと一歩のところにと迫りました。

ここに至るまでの推進機構の教職員の皆様、授業、学生指導にあたっていた先生方、そしてアクティブな学びに踏み出した学生のみなさんに、あらためて敬意を表するとともに、一層のブラッシュアップに期待したいと思います。この3、4年間だけでも日本社会と国際社会の変動は大きなものがあります。「答えのない解」に迫る教養教育・学びの「発信」がいよいよ求められています。

副学長あいさつ

京都府立大学副学長
京都三大学教養教育研究・推進機構 運営委員長

小沢 修司

教養教育の共同化は、この4月からは大学間連携共同教育推進事業（文部科学省補助事業）としての最終年度を迎えます。昨年4月には文部科学省による中間評価を受けましたが、A評価（計画通りの取組）であると取組を評価いただきました。来年度には私たちの取り組みを踏まえて「時代が求める新たな教養教育」の「京都モデル」を社会に向け発信することとしています。正念場を迎えます。

とはいえ、補助事業が終われば「共同化」の取り組みが終わるわけではありません。その発展の方向が示されたのも今年度の成果といえるかと思っています。それは11月8日に一つのまとまった姿を見せてくれました。学生シンポジウム「人・サル・植物の関係から知の源流と未来を探る」という企画を三大学の学生が企画し準備し実施してくれました。詳しくは報告書で語られていますので、そちらをご覧ください。なお、この取り組みは日経新聞の電子版（2015年12月8日付け）でも詳細に紹介されています。教育課程における共同化が学生たちによる共同化を生み出し新しい文化・学術・社会創造の道が拓かれていく。ワクワクします。



京都工芸繊維大学

京都工芸繊維大学は、明治時代の工業化や伝統産業の近代化に対応するために設立された京都高等工芸学校および京都蚕業講習所に端を発します。時代の進展とともに110余年にわたり発展を遂げながら、伝統文化の源である古都の風土の中で、「知と美と技」を探究する独自の学風を築き上げてきました。この栄光ある歴史に新たな一頁を加えるべく、豊かな人間性にもとづく技術の創造をめざして技を極め、人間の知性と感性の共鳴を求めて知と美の融合をめざし、教育研究の成果を世界に発信しています。

本学の特色としては、ものづくりを基盤とした「人に優しい実学」を目指した個性ある教育研究を行っているところです。



学長あいさつ

京都工芸繊維大学学長

古山 正雄



平成26年度に完成した教養教育共同化施設「稲盛記念会館」において、京都にある文系・理工学系・医学系の異なる個性の3大学の学生が、同じ授業を受講できるようになりました。この国立大学と公立大学が協働してカリキュラムの多様性と柔軟性を広げる試みは全国的にも初めてのもので、我が国はもとより世界に貢献しうる、まさに21世紀の知識基盤社会が求める人材を育成できるものと確信しています。

現代社会は、大量消費社会がもたらした資源の枯渇、地球的規模の環境悪化、経済社会のグローバル化、頻発するテロや増え続ける難民など深刻な諸問題に直面しています。一方、日本国内においても急速に進む少子高齢化、格差の拡大などを背景として、私たちは様々な社会問題を抱えています。

このような状況下において大学は、すべての学生に自らが専攻する専門分野とは別に人文・社会・自然にわたる幅広く普遍的な知を学習させ、倫理観や歴史観、国際的な視野を持たせる責務があります。

このことから本学では、人間形成に必要な教養を涵養し、科学技術と人間性との調和・融合を図ることができる広い視野と感性を備えた高度専門技術者を育成するための教育を実施してきまし

た。今後も地域コミュニティの中核的存在として、様々な課題を解決することができる人材を輩出することが求められており、それに応える教育を実施していきます。

副学長あいさつ

京都工芸繊維大学理事・副学長
京都三大学教養教育研究・推進機構 運営委員

大谷 芳夫

府立2大学と本学が共同して新たな教養教育に取り組もうという試みは、構想から約10年にわたる粘り強い努力の結果、平成26年度から「京都三大学教養教育共同化」の授業を開始し、まもなく3年目を迎えます。他学部の学生と共に教養教育を受けることは総合大学では珍しくありませんが、学生としての根本的なアイデンティティーである「所属大学」の異なる学生が共通の場で学び議論するということは、他では得られない貴重な体験であり、まさに「時代が求める新たな教養」の涵養に資すると確信しています。

当初は、まず着実にこの事業を推進するための組織作りや、授業及び定期試験の実施体制整備など、運営上の基礎固めの作業が中心でしたが、現在では、これまでに得られた様々な経験と知見に基づいて、事業をさらにブラッシュアップするための模索が行われています。今後とも、この事業がさらに大きく発展するよう、引き続き努力したいと思います。



京都府立医科大学

京都府立医科大学は、医学部に医学科と看護学科の一学部二学科を有する公立医科大学で、1872（明治5）年に設立されて以来、140年を超える歴史を誇る我が国でも最も古い医科大学の一つです。

本学ではこのような歴史と実績により蓄積された医学や医療技術を背景に、高い倫理観を持ち、患者の立場に立って考える優れた医療人の養成や多様な学際的研究活動を推進し、世界トップレベルの医療人材や次代を担う指導的人材を育成しています。

また、京都府民に開かれた大学として、地域医療への理解と関心、使命感を持った医学研究者や医療人を育成するとともに、最先端の研究や診療機器の整備を行うことにより世界トップレベルの医療を地域に提供し、府民等の健康増進に寄与しています。



学長あいさつ

京都府立医科大学学長

吉川 敏一



医学、看護学は純然たる自然科学のみではなく、人文科学、社会科学の要素を多分に含んでおり、不断的努力により幅広く深い教養を身につけるといことは、患者さんの悩みや痛みがわかる人間性豊かな医療人となるためにとても大切なことです。

そのような中、京都工芸繊維大学、京都府立大学と本学が、三大学それぞれの強みと特徴を生かした教養科目を提供しあう教養教育共同化は、本学の学生にとって幅広い教養を学ぶ機会を得られるだけでなく、「稲盛記念会館」において専攻分野や将来の志望の異なる他大学学生との交流を通じて多様な視点や価値観に触れ、他者を理解するコミュニケーション能力などを高めることにもつながる、非常に意義深い取組であると考えます。

本学は、「世界のトップレベルの医学を府民の医療へ」をスローガンとして、教育・研究・診療のあらゆる面で全国でも有数の実績を残すとともに、今後新たに建設する最先端がん治療研究センターなどでの研究や治療を通じた地域医療へのさらなる貢献を目指しておりますが、三大学教養教育共同化の取組が、本学における優れた医療人や世界トップレベルの研究者育成にもつながることを大いに期待しております。

副学長あいさつ

京都府立医科大学副学長
京都三大学教養教育研究・推進機構 運営委員

渡邊 能行

京都工芸繊維大学、京都府立大学と本学が、相互乗り入れで教養教育を実施する三大学の教養教育共同化が新設されました「稲盛記念会館」において開始されてはや1年が経過しました。この取り組みは、本学医学科が昨年12月第1週に医学教育分野別評価を受審しました際にも他大学の医学教育の専門家である評価委員からもユニークな取り組みとして注目を受けたところです。高等教育の実施という点では一致していますものの開設学部が異なる三大学ですので、その設置目的も成果としての教育を受けた学生の有り様も自ずと異なっている中での試行錯誤が始まったという印象を強く持ちます。昨年11月にありました三大学教養教育運営協議会におけるすべての外部委員から、この新しい取り組みを活かして府民に寄り添う優れた医師や看護師等の医療人の育成を強く希望するといった意見が寄せられました。私たち京都府立医科大学関係者はこのことを重く受け止めて、更により良き方向に進めていかなければならない使命があります。

そのためにも、我々教員の側からの視点だけでなく、当事者の医学生・看護学生の意見にも真摯に耳を傾ける必要があると考えております。

京都府知事 あいさつ

京都府知事 山田 啓二



平成 26 年 4 月から京都府立医科大学、京都府立大学及び京都工芸繊維大学の三大学により、全国で初めて国公立大学による教養教育共同化がスタートし、間もなく 3 年目を迎えます。

改めて、これまで共同化の実施に向け、御尽力いただきました各大学関係者の皆様や御支援をいただきました文部科学省の皆様に心から感謝を申し上げますとともに、敬意を表するところであります。

現在、私達を取り巻く社会環境は、急速な少子高齢化や、社会・経済のグローバル化の進展、環境・エネルギー問題など、今までに経験したことのない様々な課題に直面しており、大きな転換期にきております。このような時代を乗り越え、我が国を支える人材を育てることは社会全体の使命であり、大学教育においても専門教育だけではなく、豊かな人間性と高い倫理観を身に付けるための教養教育がますます重要になってきているところです。

このため、教養教育共同化では、三大学がそれぞれの特徴・強みを活かしたカリキュラムを提供することにより、人文・社会・自然諸分野の学問を幅広く修得可能としたところであり、京都府としても、この取組を支援するため、共同化科目を開講する教養教育共同化施設を、京セラ株式会社名誉会長の稲盛和夫様からも御寄附をいただき、平成 26 年 9 月に完成させたところです。

今後、三大学の学生の皆さんが同じ場所で共に学ぶ中で、授業だけでなく、スポーツ、文化、学術などの面において、今までにない人間関係の広がりや交流が生まれるとともに、府立植物園や京都コンサートホール、さらに、現在、建設中の新総合資料館（仮称）を含めた北山文化環境ゾーンの整備を完成させることにより、府民の皆様との交流も含め、地域全体の活性化につなげていきたいと京都府として考えております。

三大学や京都三大学教養教育研究・推進機構の皆様には、時代が求める新しい教養教育の構築に向けて更に取組を進め、その成果を教養教育「京都モデル」として全国に発信いただきますとともに、地域を担う人材の輩出に向けて引き続き御尽力いただきますよう大いに期待しております。

はじめに

平成 27 年度取組の到達点（総括コメント）

京都三大学教養教育研究・推進機構 運営委員長
京都府立大学 副学長

小沢 修司

平成 27 年度は、共同化授業を本格的に開始して 2 年目、文部科学省の大学間連携共同教育推進事業（補助事業）の最終年度を来年度に控えて、さまざまな取組が形を整えてきたといえる。取組の詳細は後に譲ることにして、まずは総括的なコメントをさせていただく。

中間評価の結果

昨年度末には文部科学省による中間評価進捗状況報告書を提出し年度当初の 4 月には面接評価を受けてきた。その結果は総括評価として A 評価（計画どおりの取組であり、現行の努力を継続することによって本事業の目的を達成することが期待できる。）をいただくことになった。

具体的には、教育改革については現場の具体的障害となりがちな学年暦の統一なども断行し成功していること、「新しい時代の教養教育」の理念も活発な FD や公開研究会等の開催により三大学で共有されていること、ステークホルダーとの協働・評価については京都府との連携のみならず、京都府の支援による教養教育共同化施設の整備さらには大学コンソーシアム京都との協働等、充実していること、そして評価についても三大学教養教育運営協議会によるモニタリングの体制が整備され適切に行われていること、最後に実施体制については京都三大学教養教育研究・推進機構の運営委員会・調整会議の組織化及びリベラルアーツセンター・教育 IR センターを活用した体制を整えているとのコメントをいただいた。

この間の関係各位の取組の努力が報われたものとして正直なところ胸をなで下ろしたのも偽らざ

る気持ちであったが、最終年度に向けて、そしてなによりも補助事業終了後の共同化の取組の継続に向けて気持ちを新たにしている。

リベラルアーツセンターの取組、学生主体のシンポジウムの開催

リベラルアーツセンターは、カリキュラム自体は形を整えてきているということもあり新たな科目開設の検討は行わず、学生主体のシンポジウム「人・サル・植物の関係から知の源流と未来を探る」の開催に力を傾注することになった。この学生主体の取組は、三大学の学生が集い合う共同化授業は実現したとしてもそもそも事業の目的として掲げていた学生同士の交流、対話、議論する力の育成には不十分なところがあるのではないかという「反省」を踏まえて学生たちに問題提起をして実現したものである。

学生同士の交流、対話、議論する力の育成という点では、カリキュラムとしてリベラルアーツ・ゼミナールを用意しており、授業内においても学生同士の交流や対話ができる教育方法の工夫を求める取組は教育 IR センターを中心に行っているところではあるが、課外での学生たちによる自主的な取組が行われたことは特筆に値するものといえる。

取組の詳細、実現に至る経緯は後述されている。お読みいただければ分かるが、リベラルアーツセンターとしては学生に対し最初の呼びかけは行い、途中は寄り添いながら支援はするものの、テーマ設定、調査研究、ゲストコメンテーターの選定（人類学・霊長類学者の山際壽一京都大学総長と松谷

茂京都府立植物園名誉園長には出演を快諾いただき感謝申し上げます)、それに当日の運営など学生の自主的で創意あふれる取組が行われたのであった。また、当日は三大学の学生で作る合同交響楽団の演奏も行われシンポジウムを大いに盛り上げていただいた。三大学の学生の交流を教育課程のみならず課外でも実現できたことは、共同化事業の明るい未来を照らし出してくれているようで嬉しい限りである。

科目担当者会議の開催と教育の質保証、教育 IR センターの取組

本機構における教育の質保証の取組は教育 IR センターを中心に行われており、授業を担当する教員へのアンケート実施と結果の共有ならびに科目担当者会議の開催という形で共同化授業を担当する教員相互が「コミュニティ」を形成しながら情報共有と教育改善への努力を組織化するという方法を採用しているところに特徴がある。本年度の科目担当者会議の開催は教育 IR センターとリベラルアーツセンターの共催で実施した。

科目担当者会議は 2015 年 8 月 5 日に「教養教育共同化科目の 1 年半を振り返って～多様な背景を持つ受講生と創る授業～」という全体テーマを設定して行われた。「多様な背景を持つ受講生」を前面に押し出した意味は、理系の学生に文系科目をどう教えるか、逆に文系の学生に理系科目をどう教えるかという課題に対し科目担当者たちの創意工夫や苦悩を交流しあい共同化授業の質と学生の満足を高めていこうという狙いが込められている。教育 IR センターからは、昨年度末に実施した教員アンケートの結果の報告も科目担当者会議で行われ教員たちの授業工夫等についての

情報共有が図られた。

科目担当者会議の結果やそこで新たに出てきた検討課題の詳細については後述の報告で確認いただきたいが、科目担当者会議を中心とした教育の質保証の取組の意義は大きいものがあることを確認しておきたい。なお、科目担当者による授業実践について広く三大学で情報共有することを期して「共同化科目の授業研究」として本報告書への寄稿をお願いした。

この科目担当者会議ならびに教員アンケートの他、教育 IR センターでは学生への授業評価アンケートや 1 年次生アンケートを実施している。詳細は後述されているのでご覧いただきたい。

学生の履修希望保障、履修登録方法の改善

昨年度に比して今年度の共同化授業の大きな改善点に履修方法の改善があげられる。昨年度の履修登録の方法は、科目毎に設定した各大学の定員の枠内で履修希望が多数を占める場合抽選で履修登録者を決定するというやり方であったため、科目によっては抽選ではじかれた学生が多く現れることとなり学生の履修希望に応えることが十分でなかった。今年度の改善は、定員余剰が生じた大学の定員を超過した大学の定員枠に移行させるという定員調整を行うことにしたのである。具体的方法については後述しているのでそちらをご覧いただくとして、定員充足状況は昨年度後期の 63.1%に比して今年度前期は 85.2%に、第 1 希望で履修登録がかなわなかった学生数は同じく 27.6%から 10.2%へと大きく改善が図られることとなったのである。



共同化事業の外部評価、社会への情報発信

最初に紹介したように、文部科学省の中間評価においても本取組が三大学教養教育運営協議会という外部評価、モニタリングの体制が整備されていることを評価されているように、本年度においても2015年11月20日に運営協議会を開催した。出席した委員からは、学生の自主的な取組として大きな成果を見せた学生シンポジウムへの高い評価を始め、共同化事業の今日の到達点を評価しながら更なる発展を希望する意見や共同化施設の更なる利用を希望する意見などをいただいた。

この他、機構では公開講座「グローバル社会をどう生きるかー多文化交流と教養教育」を開催し共同化事業の社会的発信にも取り組んだ他、大学コンソーシアム京都や大学教育学会の場でも共同化の取組をベースとした「時代が求める新たな教養教育」の姿を積極的に発信してきている。

まず、前者の公開講座であるが、教養教育の共同化にあたっては学生たちにグローバルな時代にふさわしい幅広い教養を身につけてもらうという目的を掲げており、リベラルアーツ・ゼミナールの設定においても「アメリカと中国はいま」「イスラーム世界の文化と社会」を開講している。こうした共同化の取組について広く社会に発信するために公開講座を企画した。企画にあたっては「アメリカと中国はいま」ゼミの担当者である脇田哲志京都三大学教養教育研究・推進機構特任教授が中心となり、元国連事務次長の赤阪清隆フォーリン・プレスセンター理事長に基調講演をお願いし、「イスラーム世界の文化と社会」ゼミの担当者である田村うらら金沢大学助教、それに青山公三京都府立大学名誉教授の参加を得る形で2015

年12月14日に開催の運びとなった。

後者の大学コンソーシアム京都での報告と大学教育学会でのラウンドテーブルの運営については、我々の共同化事業の取組の成果を「時代が求める新たな教養教育」像の社会的発信として全国の教育関係者や多くの市民と交流することにより陶冶し発展させより確かなものにしていこうという趣旨で積極的に取り組んでいるものである。



今後の発展に向けて

最初から述べているように来年度が大学間連携共同教育推進事業（補助事業）としての最終年度であるが、我々の共同化事業はその後も続けられていく。その成否は「時代が求める新たな教養教育」の「京都モデル」をどう発信していけるかにかかっている。と同時に、補助事業終了後の「持続可能な」実施体制ならびに共同化事業の形をどう確保していけるかにかかっている。

今年度までの共同化の取組でカリキュラムの開発や体系化、実施体制や運営、課外に及ぶ学生たちの自主的な交流の発展、地域や社会に開かれた共同化事業の実践など大枠は形を整えてきた。教養教育の「京都モデル」といっても何も奇をてらうつもりはない。その想いの一端については本報告書で言及させていただいている。来年度1年間を通じて、しっかりと議論を行い必要な補正や取組の充実を図りながら、まずは補助事業の完成を目指したい。

そのうえで、三大学で共同化の取組の成果をしっかりと議論し確認いただき、京都府を初めとするステークホルダーの協力も得ながら「持続可能な取組」へと発展させていきたいと考える。

第 1 部

教養教育共同化の展開

(1) 平成 27 年度共同化授業の概要

京都工芸繊維大学、京都府立大学、京都府立医科大学の京都三大学による全国初の共同化教養教育授業が平成 26 年 4 月から各大学で始まり、さらに後期からは京都府立大学敷地内に新設された教養教育共同化施設「稲盛記念会館」の講義室で三大学の学生が一堂に会して受講できるようになった。

そもそも三大学での共同化教養教育とは、京都三大学の各大学がリベラルアーツ系科目を中心とする教養科目を相互に提供し、提供されたすべての科目を各大学が自大学の科目として学生に提供することによって、学生の科目選択の幅を大きく増やし、学修意欲を高めようとするものである。また、文系、理工系、医学系の専門分野や将来の志望が異なる三大学の学生が授業で混在し、多様な視点や価値観を交流して、一緒に学ぶことなどを通じて豊かな人間性の形成に資することもねらいとしている。そういう意味において稲盛記念会館での授業開講により整ったといえる。

共同化授業は、三大学で共通の学年暦を定め、前期は 4 月 13 日（月）から 8 月 3 日（月）（試験日を含む）、後期は 9 月 28 日（月）から 2 月 8 日（月）（試験日を含む）の期間、前年度と同様で、毎週月曜日の午後 3 時の時限を基本に開講することとした。

平成 27 年度共同化カリキュラムの概要

共同化教養教育の 2 年目となる平成 27 年度は、共同化科目として、別表の「共同化科目一覧」のとおり講義方式 65 科目（人文系 20 科目、社会系 22 科目、自然系 23 科目）、リベラルアーツ・ゼミナール 9 科目（人文系 2 科目、社会系 6 科目、

自然系 1 科目）の 74 科目とし、平成 26 年度の 68 科目から 6 科目増と充実させることとし、これらの科目は三大学いずれの学生も自大学の授業として履修でき、学生の科目選択の幅が 2 ～ 5 倍と大きく増加するとともに、諸分野をバランスよく履修することができることを目指した。

講義系 65 科目のうち 12 科目は、京都という地の地域的、歴史的、文化的特色を活かした「京都学」の授業であり、そのうちの 1 科目「英語で京都」は、3 回生以上向けの科目を導入・新設することにより、共同化科目の拡大を図った。

さらに、リベラルアーツ・ゼミナールにおいても、「製品の機能から科学を学ぶ」と 2 回生以上向けの「経営哲学」を新設し 9 科目となり、学生同士が交流し、共通のテーマで対話し議論する力を育むことをねらいとした少人数のゼミナール科目として、考え方や学び方の基礎力を培ったり、グローバルな視野を広げるなど教養教育授業の充実を図った。

共同化授業の履修定員等

稲盛記念会館がマンモス授業を避けて最大 200 人規模で整備されたこともあり、科目ごとに履修定員を設定した。また、1 つの授業に三大学の学生が混在することとなるため、原則として、科目定員の半分を科目提供大学が、残りの半分をその他 2 校で 1 年生の学年定員に応じて按分し、学生の履修希望が各大学に配分された履修定員を超えたときは各大学で抽選を行い、履修者を決定することとした。なお、前年度後期で課題となった履修定員枠の制限は、今年度導入した定員の見直しにより一定の改善がなされ、成果が見られたと言える。

学生への受講ガイダンス

共同化授業を受講する学生に分かりやすく周知を行う必要があるため、三大学共通のガイダンス冊子「京都三大学教養教育共同化科目受講案内」(資料編参照)を作成した。

冊子には、この 1 冊があればスムーズに共同化授業を受講できるよう、共同化の理念・目的をはじめ、共同化の履修方法、共同化科目一覧、前後期ごとの各科目の履修定員、各科目概要、授業が行われる各大学学舎・講義室のキャンパスガイド、開講時間割などを掲載した。各科目概要には、科目の概要だけでなく、学生へのメッセージや授業目的区分(別表の「共同化科目一覧」に掲載しているもの)を各科目担当教員に照会し、掲載した。

学生への受講ガイダンスは、京都工芸繊維大学及び京都府立大学においては、入学に係る新入生履修ガイダンス時に、冊子の配付と併せて共同化科目の履修に関する時間枠を設けて説明を行った。この両大学では、共同化科目を 2 回生以上も受講することができるため、冊子を上回生にも配付した。京都府立医科大学では、新入生履修ガイダンス時に冊子の配付を行った。

また、共同化科目の履修に迷う学生へのアドバイスを行うため、機構特任教員による「個別履修相談会」を、4 月 2 日に実施し、19 人(前年度は 15 人)の参加があった。

(2) 共同化授業の受講状況

共同化科目履修定員の調整について

平成 26 年度において、科目の履修登録ならびに履修定員の設定については、三大学とも前後期に分けて履修登録を行い、履修登録期間は開講前に設定することとした。学生が各大学で共同化科目の履修登録を行い、大学ごとに割り当てられた履修定員（教室収容定数の半分を提供大学に割り当て、残りの半分以上をその他 2 校で 1 年生の学生定員に応じて按分）にもとづき履修者を決定した。各大学での履修者の決定に際しては定員をオーバーした場合は抽選を行うこと、抽選の結果各大学で定員に空きが生じた場合にあっては大学間での調整（融通）は行わないこと、を原則とした。そのため、第一希望履修登録に漏れる学生が多数生じたことから、平成 27 年度においては改善を行うこととした。

まず、機構において各大学の登録者数が各大学定員を下回っている場合は当該登録者数で確定することとし、1 大学あるいは 2 大学の登録者数が各大学定員を超過する場合は余剰が生じた大学の定員枠を超過した大学の定員枠に移管し、各大学の定員枠を確定することとした。なお、履修希望登録者数が、調整後の定員を超過する大学にあっては抽選により履修登録者を決定し、さらに 3 大学のそれぞれで各大学定員を超過する場合はそのまま各大学とも抽選を行うという方法により学生の履修希望をできる限り応えることとした。なお、登録時期については 1 回目の授業終了後とした。

履修登録の状況

平成 27 年度前期の共同化科目は 38 科目であり、京都工芸繊維大学から 15 科目、京都府立大

学から 12 科目、京都府立医科大学から 6 科目、機構から 5 科目（うち「リベラルアーツ・ゼミナールⅡ（現代社会に学ぶ問う力・書く力）」は、a、b として 2 回実施）を提供した。38 科目中 5 科目は、夏期集中として開講した。

前期科目に係る学生の履修登録の状況は、別表「三大学教養教育共同化科目の履修登録者（平成 27 年度前期分）のとおりである。設定した定員総数が 4,882 人、履修登録者総数が 4,122 人であった。大学別では、京都工芸繊維大学が 1,894 人、京都府立大学が 1,806 人、京都府立医科大学が 422 人である。三大学学生の交流状況を示す自大学以外の科目を履修登録した学生は 1,396 人であり、履修登録者総数に占める割合は 35.6 %であった。

次に、後期の共同化科目は 37 科目であり、京都工芸繊維大学から 15 科目、京都府立大学から 9 科目、京都府立医科大学から 5 科目、機構から 8 科目（うち「リベラルアーツ・ゼミナールⅠ（感覚で探る問題解決の方法）」は、b として前期に続き 2 回目の実施）を提供した。37 科目中 2 科目は、冬期等の集中講義科目として開講した。

後期科目に係る学生の履修登録の状況は、別表「三大学教養教育共同化科目の履修登録者（平成 27 年度後期分）のとおりである。設定した定員総数が 3,936 人、履修登録者総数が 2,515 人であった。大学別では、京都工芸繊維大学が 1,163 人、京都府立大学が 1,240 人、京都府立医科大学が 112 人である。三大学学生の交流状況を示す自大学以外の科目を履修登録した学生は 1,016 人であり、履修登録者総数に占める割合は 43.2%となり、前期と比べて三大学間の交流が進展した。

(2) 共同化授業の受講状況

三大学教養教育共同化科目の履修登録者（平成 27 年度前期）

提供大学	開講曜日	科目名	履修者数				交流率
			工織大	府大	医大	合計	
工織大	月 3	公共哲学	33	26	0	59	44.1%
工織大	月 3	現代教育論	99	18	0	117	15.4%
工織大	月 3	エネルギー科学	77	7	0	84	8.3%
工織大	月 3	生物学概論 I	50	31	0	81	38.3%
工織大	月 3	環境問題と持続可能な社会	54	21	2	77	29.9%
府大	月 3	京都の歴史 I	76	114	5	195	41.5%
府大	月 3	現代の政治	15	30	1	46	34.8%
府大	月 3	現代京都論	103	179	8	290	38.3%
府大	月 3	物理学 I	71	52	0	123	57.7%
医大	月 3	医史学	7	19	99	125	20.8%
機構	月 3	リベラルアーツ・ゼミナールⅡ a (現代社会に学ぶ問う力・書く力)	12	11	3	26	-
工織大	月 4	日本近現代文学	44	26	1	71	38.0%
工織大	月 4	美と芸術	123	41	3	167	26.3%
工織大	月 4	化学概論 I	53	5	0	58	8.6%
工織大	月 4	人と自然と数学 a	82	7	4	93	11.8%
工織大	月 4	キャンパスヘルス概論	91	60	0	151	39.7%
府大	月 4	京都の文学 I	24	58	0	82	29.3%
府大	月 4	社会学 I	20	181	2	203	10.8%
府大	月 4	食と健康の科学	53	59	8	120	50.8%
医大	月 4	日本文学 I	15	19	7	41	82.9%
医大	月 4	人文地理学 I	70	33	63	166	62.0%
医大	月 4	生物学的人間学	24	23	72	119	39.5%
機構	月 4	リベラルアーツ・ゼミナールⅠ a (感覚で探る問題解決の方法)	11	9	10	30	-
工織大	月 5	比較宗教学	111	59	4	174	36.2%
工織大	月 5	日本史	49	28	0	77	36.4%
工織大	月 5	西洋文学論	17	10	1	28	39.3%
工織大	月 5	心理学	123	55	16	194	36.6%
工織大	月 5	京の産業技術史	36	9	0	45	20.0%
府大	月 5	アジアの歴史と文化	36	75	0	111	32.4%
府大	月 5	現代日本と経済	15	19	0	34	44.1%
府大	月 5	現代社会とジェンダー	24	88	3	115	23.5%
府大	月 5	京都の自然と森林	64	105	2	171	38.6%
機構	月 5	京都学事始—近代京都と三大学—	30	33	0	63	-
機構	月 5	リベラルアーツ・ゼミナールⅡ b (現代社会に学ぶ問う力・書く力)	10	9	0	19	-
府大	集中	生命科学講話	48	211	24	283	25.4%
医大	集中	発達心理学	70	51	73	194	62.4%
医大	集中	時間生物学特論 (※ 3 回生以上 (修士課程大学院生を含む))	27	2	1	30	96.7%
機構	集中	リベラルアーツ・ゼミナールⅦ (感性の実践哲学)	15	12	3	30	-
機構	集中	リベラルアーツ・ゼミナールⅣ (現代社会と映画製作)	12	11	7	30	-
		合 計	1894	1806	422	4122	35.6%

(注) 交流率：科目提供大学以外の大学の履修者数をその科目の全履修者数で割った値。

(2) 共同化授業の受講状況

三大学教養教育共同化科目の履修登録者（平成 27 年度後期）

提供大学	開講曜日	科目名	履修者数				交流率
			工織大	府大	医大	合計	
工織大	月 3	哲学	77	35	2	114	32.5%
工織大	月 3	東西文化交流史	92	68	3	163	43.6%
工織大	月 3	京の意匠	30	12	0	42	28.6%
工織大	月 3	文化社会学	6	23	1	30	80.0%
工織大	月 3	生物学概論Ⅱ	27	23	1	51	47.1%
工織大	月 3	科学史	59	27	1	87	32.2%
府大	月 3	京都の歴史Ⅱ	69	126	1	196	35.7%
府大	月 3	国際政治	8	39	2	49	20.4%
医大	月 3	文芸創作論	4	20	5	29	82.8%
機構	月 3	リベラルアーツ・ゼミナールⅢ (社会科学の学び方)	5	7	0	12	-
機構	月 3	意外と知らない植物の世界	23	22	6	51	-
機構	月 3	リベラルアーツ・ゼミナールⅧ (製品の機能から科学を学ぶ)	3	8	1	12	-
工織大	月 4	人と自然と数学β	50	4	0	54	7.4%
工織大	月 4	人と自然と物理学	15	2	0	17	11.8%
府大	月 4	京都の文学Ⅱ	21	52	0	73	28.8%
府大	月 4	社会学Ⅱ	41	97	0	138	29.7%
府大	月 4	現代社会と心	69	121	3	193	37.3%
府大	月 4	宇宙と地球の科学	30	25	2	57	56.1%
医大	月 4	宗教と文化	26	23	1	50	98.0%
医大	月 4	ラテン語	47	37	7	91	92.3%
医大	月 4	日本文学Ⅱ	18	18	1	37	97.3%
医大	月 4	人文地理学Ⅱ	75	46	53	174	69.5%
機構	月 4	リベラルアーツ・ゼミナールⅠ b (感覚で探る問題解決の方法)	17	5	0	22	-
工織大	月 5	西洋文化論	80	58	1	139	42.4%
工織大	月 5	政治学	11	17	0	28	60.7%
工織大	月 5	経済学入門	17	7	0	24	29.2%
工織大	月 5	人権教育	1	13	0	14	92.9%
工織大	月 5	化学概論Ⅱ	18	1	0	19	5.3%
工織大	月 5	地球の科学	49	15	0	64	23.4%
工織大	月 5	科学と思想	15	6	0	21	28.6%
府大	月 5	生活と経済	16	85	1	102	16.7%
府大	月 5	人類生態学	42	59	0	101	41.6%
府大	月 5	京都の農林業	77	116	0	193	39.9%
機構	月 5	英語で京都（※ 3 回生以上）	4	1	0	5	-
機構	月 5	リベラルアーツ・ゼミナールⅨ (経営哲学)（※ 2 回生以上）	1	2	0	3	-
機構	集中	リベラルアーツ・ゼミナールⅥ (現代イスラーム世界の文化と社会)	10	10	10	30	-
機構	集中	リベラルアーツ・ゼミナールⅤ (アメリカと中国はいま)	10	10	10	30	-
		合 計	1163	1240	112	2515	43.2%

(注) 交流率：科目提供大学以外の大学の履修者数をその科目の全履修者数で割った値。

(3) 人・サル・植物の関係から知の源流と未来を探る ～リベラルアーツセンター主催 学生シンポジウム報告～

京都三大学教養教育研究・推進機構 リベラルアーツセンター 特任准教授

藤井 陽奈子

平成 27 年 11 月 8 日（日）に、京都三大学教養教育研究・推進機構リベラルアーツセンター主催の学生シンポジウム「人・サル・植物の関係から知の源流と未来を探る」を開催した。

本事業ではこれまで様々なシンポジウムやフォーラム等を開催してきたが、それらは本事業における教養教育とは何か、特にその方向性や独自性について、著名な先生方の講演を踏まえて議論するものだった。そうしたシンポジウム等を通じて本事業の取組と理念を社会へ発信してきたが、学生よりも一般の参加者が多かった。そこで、昨年度は学生を対象とする講演とワークショップを開催し、多数の学生の参加により盛会だった。けれども、依然として、著名な先生の話に拝聴し教示を頂くという受身的な姿勢に変わりなかった。

本事業の目的である「学生同士が交流し、対話し議論する力を育む」ことを実現することが受身でない学生の姿勢を育むと考え、本年度は学生主体によるシンポジウムを企画した。本シンポジウムを学生教育の場とし、その成果を社会に向けて発信する。

ここでは、山あり谷あり、本シンポジウムに向けて奮闘し尽力した学生たちの長い道のりを中心に報告する。

8 月 初顔合わせ

6 月頃より、本シンポジウム企画に参加する学生を募った。昨年度と本年度に三大学教養教育共同化科目、特に「リベラルアーツ・ゼミナール」を受講した学生を軸に、その友人や同級生、クラブの仲間など学生同士で声を掛け合った結果、お互いどこかでつながっている三大学のメンバーが集まった。「人・サル・植物の相互関係」につい

て調べ考えることで「知の源流」を捉え「知の未来」を描き出すことになり、三大学混合の 4 つのグループに分かれてそれぞれの研究テーマを定め、調査活動に取り組むこととなった。

8 月の第 1 回準備会議には三大学から計 20 名の学生たちが参集し、初顔合わせにもかかわらず、意欲的に議論が進められた。

また、学生たちの熱意に賛同し、人類学・霊長類学者で京都大学総長の山極壽一先生と植物学・植物園学者で京都府立植物園名誉園長の松谷茂先生がゲストコメンテーターとして参加下さることになった。

三大学の学生たちが、自主的なゼミナールを経て自ら思考し新たな「知」を創造する。このシンポジウムが本事業の象徴的な空間となることを強く願いながら、「知」の旅路へ出発する学生たちを見送った。

9 月－10 月 なかなか決まらない研究テーマとフィールドワーク

学生たちは、人、サル、植物の関係から知の源流と未来を探るという壮大なテーマのもと、具体的な研究テーマを絞り込むために、まずはフィールドワークに出かけることにした。あらかじめ、文献や資料を手がかりに議論を経て仮説を立てていたものの、フィールドワークで現場を目の当たりにし本物を観察して見れば見るほど、現場の関係者の話を聴けば聴くほど、仮説とのギャップに驚きを隠せなかった。

こうして、なかなか定まらない研究テーマとの格闘の日々が続いた。さらに、個々の学生の授業、実験、実習、クラブ、アルバイトのスケジュールを調整し役割分担しつつ、発見して調べた情報や

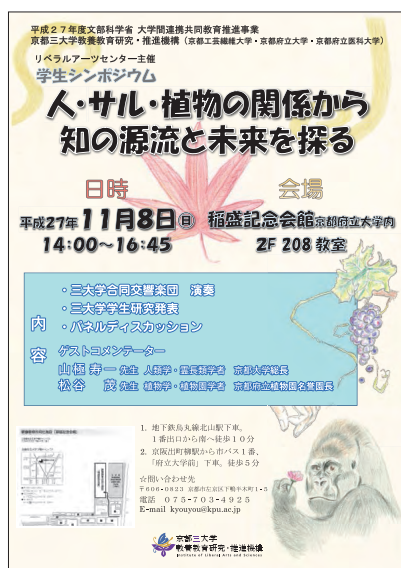
(3) 人・サル・植物の関係から知の源流と未来を探る ～リベラルアーツセンター主催 学生シンポジウム報告～

考えはチーム内で必ず共有するシステムをつくったが、何よりも三大学の学生同士が息を合わせ、目的を果たすために足並みをそろえることに配慮が必要だった。できるだけ議論の場を設け、かつフィールドワークに出かけて観察し発見することを繰り返すことで、皆の視線の先を同じにした。

10月に入り、ようやく各チームの研究テーマが明確となり調査・研究を進めていることを喜んでいたのもつかの間、11月まであと1か月。走りきるしかない。



議論する三大学の学生たち



学生が作成した広報紙

11月7日学生シンポジウム 前日

シンポジウム前日、学生たちは集まり、各チー

ムの研究発表内容の仕上げと確認を互いに評しながら行った。

今回の学生たちの特徴は、自身のチームとのみかかわって調査研究活動を行うだけでなく、異なるチーム同士、あるいは異なるチームに個人が飛び込んで互いのテーマの議論をすることがしばしばあったことだ。これは、8月の顔合わせ当初から学生たちにより発せられた方針で、三大学の学生が集まる研究活動とシンポジウムであるならば、なおさら交流の幅と機会を増やして互いの持ち味を活かしたいとのことだった。

期待通り、異なるチームのメンバーからのアドバイスで新たな発見や別の視点、プレゼンテーションの仕方の閃きなどにつながった。大学とチームの垣根を超えて対話する、笑う、ある時は共に歌う姿がそこにはあった。

また、会場の設営は、こうした研究発表をする学生と共に、当日スタッフとしてビデオや写真撮影などを手掛ける三大学の学生たちが行った。ここにおいても、研究発表をする学生とスタッフとして参加する三大学の学生同士の交流が見て取れた。

11月8日学生シンポジウム 当日

学生たちは準備のために、会場の稲盛記念会館208教室へ早々とやって来た。

午後2時に始まった。藤井が司会進行を務め、石田昭人リベラルアーツセンター長が開会のあいさつに立った。

先述のとおり、ゲストコメンテーターに、人類学・霊長類学者の山極壽一・京都大学総長と植物学・植物園学の松谷茂・京都府立植物園名誉園長

(3) 人・サル・植物の関係から知の源流と未来を探る ～リベラルアーツセンター主催 学生シンポジウム報告～

を迎え、また、この学生シンポジウムに関心のあ
る学生や教職員と共に京都と大阪の高校生が来場
者として加わった。

まずオープニングでは、京都三大学合同交響楽
団の5名が演奏した。曲目は、ハイドンの
「DIVERTIMENTO」とジブリのアニメーション
「魔女の宅急便」より「海に見える街」。

演奏後、4チームのプレゼンテーションを開始
した。

① 「触れているようで触れられている!？」

ー 植物の生存戦略

(構成：京都工芸繊維大学1回生(俣野)、京都
府立大学1回生(浅野・植野・川崎)、京都府立
医科大学1回生(吉田))

このチームは、フィールドワークで京都府立植
物園に通った。植物にはどのような特性があるの
か、植物はどのような感覚を持っているのかなど
を調べる手がかりを探しに行き、そこでたくさん
のヒントを得た。また、資料となる写真を撮影す
るために、幾度となく植物園へ出かけた。

研究では、植物の触覚に着目し、ハエトリグサ
やオジギソウなどを例に挙げ、植物は触覚を持
つと仮定した。また、モンキー・オーキッドと呼ば
れる、サルの顔のような外見をした花(ラン)を
紹介し、この花がサルの顔の形を覚えることにも
触覚が用いられたのではないかと推測した。



左) 植物園でつる性木本(樹木)の観察と撮影 右) 発表本番

発表の最後には、植物の触覚的な生存戦略を用
いた新しい製品を提案した。既存の製品として、
人間がオナモミを見てマジックテープを開発した
例を挙げた後、コメンテーターの松谷茂先生は、
オナモミが服などにくっつく体験の有無を学生に
問われた。その問いの意味を含めて、本物の植物
を実際に様々な角度から人間の五感を使って観察
することで、文献や資料の内容について現実的に
理解しわかることの大切さを学んだようだ。

② 「味覚から考える食への工夫

ー サル、ヒト、植物とおいしさ

(構成：京都工芸繊維大学2回生(中尾・長野)、
京都府立大学2回生(神崎)1回生(吉田)、京
都府立医科大学1回生(増子・山口))

大学の食堂で話し合い、京都市動物園や嵐山モ
ンキーパークいわたま等にフィールドワークに
行き、壁にぶつかり、また方向性を変えて調査、
という作業を繰り返しながらなんとか本番を迎え
た。その間に、たくさんの人の意見を聞き、教わ
ることも多かったそうだ。

その過程で、観光地などでサルが人の食べ物を
奪うということがあることから、サルにとって人
の食べ物はおいしいのか、またその逆はどうなの

かという疑問が生まれ、味覚に着目することにした。



京都市動物園にてフィールドワーク

サルは季節ごとに手に入れられる食べ物のうち植物を中心に一番栄養のあるものを食べる。ヒトの好む味の代表と言えば甘味、嫌う味といえば苦味だが、基本的にサルとヒトの好みは一致する。植物はそのような動物の味覚を利用して進化してきた。甘味のある果実をサルが食べ、種子だけを排泄させて生育地を広げる一方、苦味のある毒で食べられないようにしている。その中でヒトだけは調理という工夫をして食のレパートリーを広げた。これは食への余裕であり、新たな文化を生み出す。よって、このチームは、ヒトの食の簡便化や食の娯楽化は余裕と共に生まれてくる文化だと考えた。

コメンテーターの山極壽一先生によると、ヒトは味という感覚を情報化して社会交渉の道具とすることで発展してきたそうだ。このようなヒト独特の発展はさらに新たな知へとつながり、益々私たちに今までに無い経験と文化をもたらしてくれるのではないかと発表を結んだ。

③ 「Hand in hand - 協調性を考える」

(構成：京都工芸繊維大学 2 回生 (小林)、京都府立医科大学 1 回生 (西村・埜中))

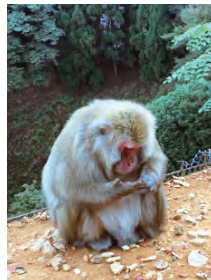
協力：京都府立医科大学 2 回生 (坂田))

協調性の有無がサルとヒトを大きく区別していると考え、サルの協調性の有無を調べるため、嵐山モンキーパークいわたやまに赴いた。そこでは飼育員の方にインタビューを行い、サルには共同して何かを行う能力としての協調性が未確認であることがわかった。実際にサルを観察すると、例えば木の実を連携して取ったりする様子が見られなかったため、協調性は見られないことが確認できたとのこと。

発表では、まず協調性について理解するために、ハンバーガーショップで注文の順番が前後しても譲り合えるという身近なヒトの協調性が発揮される場面を、初めに実演して見せた。次に、サルの場合、先の場面のハンバーガーショップではいったいどうなるのか、サルになりきって実演して示した。



サルを実演



サルの観察

では、ヒトの協調性を高めるにはどうすればよいか。植物には、ヒトのストレスを緩和する効果があることが科学的データで示されている。ストレスが協調性にマイナスの影響を及ぼすとするならば、植物によってストレスを、特に人間関係におけるストレスを緩和し協調性を高められるのではないかと提案をした。

コメンテーターの山極壽一先生によると、「サルには序列社会があるという点で協調性が認められるのではないかと。しかし、相手の心を読む能力

はない」そうだ。

一方、コメンテーターの松谷茂先生は植物のストレス軽減効果について言及され、このようなデータを使った経済効果の算定に関する話は興味深かった。

④ 「高山における環境の変化と適応の連鎖

ー比叡山を通してヴィルンガ山地の未来を考える」

(構成：京都工芸繊維大学2回生(伊藤)、京都府立大学2回生(神田・清瀧)、京都府立医科大学1回生(石田・高橋))

フィールドワーク先は比叡山。延暦寺では、管理部主事の方に比叡山での動植物の変遷について話を伺った。その話の中で印象的だったのは、延暦寺境外林の約九割が人工林であることと、人が山に入り、動植物の関係が変化し、比叡山を住処とするサルがいなくなったことだという。さらに、実際に木々の状態を確認し、比叡山を元の自然な状態に戻すことは困難であることを学んだ。フィールドワークを通し、現地の人々の意見や状況を直に聞く、足で知ることの重要性を学ぶことが出来たそうだ。

このチームは、知を「環境に適応する能力」と定義した。そして、山地における人間と動植物の関係を研究対象として選定した。ここで、山地を研究対象とした理由は、人間が流入し、内部の自然環境を変化させた具体的な例であり、サルと植物、及び人間が同居する地域であるためだ。



比叡山延暦寺にてインタビュー

着目したのは、日本の比叡山とアフリカのヴィルンガ山地である。両山地の歴史や現状を学ぶことで、山地の抱える深刻な問題に関する知見を得た。そして、それらの知見を基に、両山地の未来予想を行い、身近な山地の環境を保護する為の具体的な対策を考えた。これらの具体案の一部は、コメンテーターの山極壽一先生によると、実際に既にヴィルンガ山地において計画されているらしく、それを聴いた学生たちは嬉しそうだった。

本シンポジウムでは、プレゼンテーション内容をわかりやすくするために、サルになりきって劇仕立てで説明する工夫をした。本報告では、三番目に「Hand in handー協調性を考える」を発表したチームの実演を写真と共に提示したが、一番目に「触れているようで触れられている!?ー植物の生存戦略」を発表したチームによるサルと花の見事な共演も忘れてはならない。

発表後、ゲストコメンテーターの山極壽一先生と松谷茂先生それぞれから、各チームの研究内容について先生方の研究活動の話を交えながら貴重なご意見と評を頂いた。

続いて、本シンポジウムは佳境に入り、発表し

た学生たちとゲストコメンテーターの先生方によるパネルディスカッションが行われた。コーディネーターとして石田リベラルアーツセンター長が加わり、会場からの様々な質問に答えた。応答した学生たちの発言や表現は笑いを誘った。

プログラムは終了を迎え、京都三大学教養教育研究・推進機構の小沢修司運営委員長による閉会のあいさつ後、再び、発表した学生たちへの大きな拍手をもって幕を閉じた。



パネルディスカッション

今後の課題

学生主体のシンポジウムとしての目標は、概ね達成されたと思う。学生同士が交流し、共通のテーマで議論するという自主的なゼミナールを経て研究課題に向き合った。研究過程では積極的にフィールドワークへ出かけ、現場の関係者の話を聴き、調査を通じて自らの考えと折り合いをつけた。受身でない姿勢は、研究活動だけでなく、シンポジウムの運営やプログラム内容にも現れている。

今後の課題として、一つは、研究内容の正当性を裏付けるデータが不足のため信憑性に欠けるとの見方があったことを踏まえ、改善策を講じる必要がある。ただ、研究期間が数か月という短期間

に最善を尽くし、また既成概念に囚われない発想は評価し大事にしたい。二つ目は、学生主体活動や企画を継続することだ。三つ目は、三大学学生の来場者を含む参加者数の増加。これは意欲をもって自主的に活動できる人材の育成にも関わる。

三大学学生の自主的な活動はまだ始まったばかりである。本シンポジウムは、その第一歩であることを強調する。

最後に、学生たちにご指導を頂いた三大学と他大学の研究者の皆様、並びにご協力頂いた関係者の皆様に心より感謝申し上げるとともに厚くお礼申し上げたい。

プログラム

1. 開会挨拶
2. 三大学合同交響楽団演奏
3. 三大学学生研究発表Ⅰ
 - ① 「触れているようで触れられている!?
ー植物の生存戦略」
 - ② 「味覚から考える食への工夫
ーサル、ヒト、植物とおいしさ」
4. 三大学学生研究発表Ⅱ
 - ③ 「Hand in hand
ー協調性を考える」
 - ④ 「高山における環境の変化と適応の連鎖ー比叡山を通してヴィルンガ山地の未来を考える」
5. ゲストコメンテーターによるコメント
6. パネルディスカッション
7. 閉会挨拶

平成27年度文部科学省 大学間連携共同教育推進事業
京都三大学教養教育研究・推進機構（京都工芸繊維大学・京都府立大学・京都府立医科大学）

リベラルアーツセンター主催

学生シンポジウム

人・サル・植物の関係から 知の源流と未来を探る

日時

会場

平成27年 **11月8日** 日 **稲盛記念会館** 京都府立大学内
14:00～16:45 **2F 208 教室**

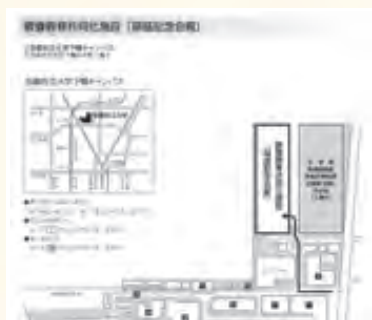
内
容

- ・三大学合同交響楽団 演奏
- ・三大学学生研究発表
- ・パネルディスカッション

ゲストコメンテーター

山極 寿一 先生 人類学・霊長類学者 京都大学総長

松谷 茂 先生 植物学・植物園学者 京都府立植物園名誉園長



1. 地下鉄烏丸線北山駅下車。
1番出口から南へ徒歩10分
2. 京阪出町柳駅から市バス1番、
「府立大学前」下車。徒歩5分

☆問い合わせ先

〒606-0823 京都市左京区下鴨半木町1-5

電話 075-703-4925

E-mail kyouyou@kpu.ac.jp



京都三大学
教養教育研究・推進機構
Institute of Liberal Arts and Sciences



(4) 府民公開講座

日時

平成 27 年 12 月 13 日 (日) 14:00 ~ 17:00

会場

教養教育共同化施設「稲盛記念会館」
1 階 104 講義室 (京都府立大学内)

テーマ

「グローバル社会をどう生きるか」
ー多文化交流と教養教育ー

講師

1. 基調講演
赤阪清隆氏 (公益財団法人フォーリン・プレスセンター理事長、元国際連合広報担当事務次長)
2. トークセッション
赤阪清隆氏
青山公三氏 (京都府立大学名誉教授)
田村うらら氏 (金沢大学特任助教)
脇田哲志氏 (京都府立大学特任教授)

来場者

一般府民・教育関係者・学生・生徒 約 50 名

本講座の趣旨

京都工芸繊維大学、京都府立大学、京都府立医科大学の三大学は、学生たちにグローバルな時代

にふさわしい幅広い教養を身につけてもらうために、教養教育の共同化を推進している。その目標の一つが、世界の人々の多様な生き方を受け止め、豊かな感性や倫理観を養っていくことである。この府民公開講座では、長年、国際社会の最前線で活躍されている赤阪清隆元国連事務次長をゲストスピーカーに招き、グローバル社会をどう生きていくべきかを、文化の交流や教育のあり方などの観点から考えていく。

基調講演の概要

「グローバル社会をどう生きるか」
ー多文化交流と教養教育ー

赤阪清隆氏

1. 世界を変えつつある大きなうねり

グローバル化は情報技術、輸送や航空網の発展とともに今後ますます加速する。これは、各国の経済成長を高め、人々を豊かにする反面、移民、人種対立、経済格差、組織犯罪、貿易摩擦、金融危機、大気汚染、気候変動などの問題を激化している。これらの問題に対しては、これまでのような国内対策や二国間外交では解決できず、地球規模で対処せざるを得ない。何人もグローバル化の影響から逃れられない。ヨーロッパでは、移民に対して国によって異なる施策が取られた。ドイツ、イギリスではそれぞれの文化を独立、共存させる施策、フランスでは本国に同質化させる施策が取られたが、いずれも、移民と本国民との対立を招き失敗に終わっている。マレーシア、スイスは複数の人種がそれぞれの文化、言語を保ちながら共存しており、多文化社会が成り立っている例である。

2. グローバルに活躍できるタフな人材

経団連は、わが国の企業には、国際的な現場の問題への積極的な対応能力と、コミュニケーション能力を併せ持つグローバル人材が必要だとしている。

グローバル人材が必要な理由の一つは、日本の製造業の海外事業展開が進んでいることにある。日本の国連分担金は全体の約 11% であるにも関わらず、国連専門職員全体約 3 万人中、日本人は 805 人 (2.5%) である (2012 年末時点)。国際機関にはもっと多くの日本人が求められている。

3. グローバルに生きるための資質

国際機関で長年働いてきた経験から、グローバル人材に求められる資質は、好奇心、楽天主、自信、外向的な性格、コミュニケーション能力、教養と異文化への理解、包容力などが挙げられる。そしてこれらの資質は全て継続的努力で得られるものである。

日本の若者は内向きといわれているが、高校生の進路に関する意識調査によると、「グローバル社会で通用する人材になりたいと思うか」の質問に対し、「ぜひになりたい」と「できればになりたい」と回答した高校生は全体の 54.3% (表 1) となっている。最近日本では、親が子どもの海外留学に反対し、企業の方も、留学して帰国した学生の就職に意欲的でなかったり、大学でも奨学金、英語、コミュニケーション能力など外国でいろいろ活躍するためのサポートシステムを整えていなかったりする。親、企業、大学等が、若い人の海外留学への意欲を削ぐのではなく、サポートしていくべきである。

では、グローバル人材としての教養をどのようにして身につけるのか。

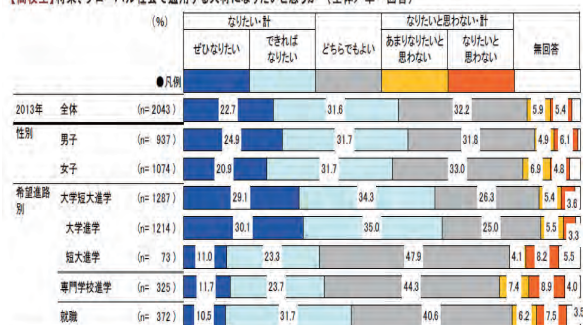
(1) 世界の動きを知る／異文化と交流する

世界の動きを知ることが重要であるが、最近の若者は新聞を読まない傾向がある。(表 2) BBC の「ワールドサービス」という 6 分間のラジオ番組はインターネットで無料で聴け、英語の勉強にもなり、世界の動きを知るのに最適である。その他、エコノミスト、ニュースウィーク、CNN などがあり、どれか 1 つくらいは読んでいただきたい。

また、異文化を知るための最善策は海外留学である。政府主導の「トビタテ! 留学 JAPAN」とい

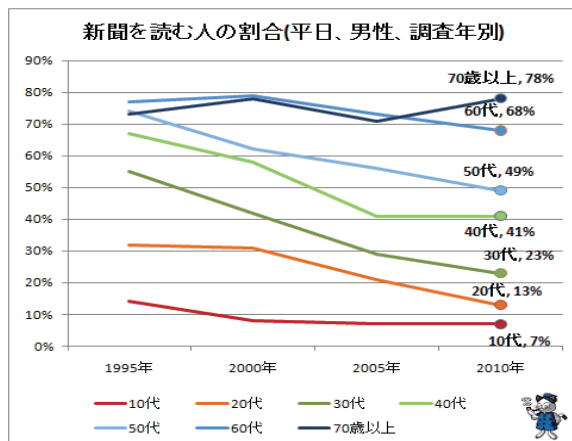
(表 1)

【高校生】将来、グローバル社会で通用する人材になりたいと思うか (全体ノ単一回答)



第6回「高校生と保護者の進路に関する意識調査」2013年
一般社団法人全国高等学校PTA連合会・株式会社リクルートマーケティングパートナーズ 合同調査

(表 2)



出典：NHK 放送文化研究所調査 (2011 年 2 月発表) をベースにしたガベジニュース

う海外留学支援制度もあり、是非利用してほしい。

(2) コミュニケーション能力を磨く

元ミスユニバース日本最高責任者であったイネス・リグロンは、日本の女性について、「日本の女性は世界一になれる。」と述べた。しかし短所として、会話中に目を合わせない、意見を言わないといった点を挙げている。日本人には是非とも個性や主張を身につけ、自信を持ってほしい。

(3) 文明の行く末について考える

オックスフォード大学出身のニール・ファーガソン（現ハーバード大学教授）は、「西洋文明は過去の遺物となるであろう」と述べている。

アメリカも内部でいろいろな議論が行われている。「アメリカが二流国家に転落することはない。」とリー・クアンユーが言い、ジョセフ・S・ナイの『アメリカの世紀は終わらない』という本が売られているが、他方でアメリカは、相対的に小さい国になるという意見も一般的になっている。

他方アジアは、もうすぐ中国が世界一の経済大国になり、インドもめざましい発展を遂げている。東南アジアが、これから2030年くらいまで、軒並み6%～7%の経済成長を遂げると予想されて

いる。アジアの世紀がやってくる。（表3）

では中国はどこへいくのか。習近平国家主席は「中国の夢」として、中華民族の偉大な復興を掲げている。中国が大きくなるにつれて、二つの大きな問題が生じてくる。一つは、既にできている国際秩序に中国は挑戦するのかということである。国連や、OECD、アジア開発銀行、世界銀行、IMF に対する、アジアインフラ投資銀行、シルクロード基金、BRICS 銀行などの動きは、そのような状況を示している。

もう一つの重要な問題は、これまで世界各国が一生懸命つくってきた普遍的な価値—人権、法の支配や、民主主義を中国が認めようとしていないということである。温家宝元首相は、世界に普遍的な人権を認めるような発言をしていたが、今の習近平政権になって、この話はタブーになった。

4. アジアの世紀—世界に何を残すのか—

アジアの価値とは、以下の点が挙げられる。

- ◆個人より共同体（家族、会社、社会、国）の利益を優先
- ◆公衆道徳、社会の調和、チームワーク
- ◆謙譲、自制、自己犠牲、敬老、勤儉、勤勉
- ◆経済の繁栄、進歩、調和、法と秩序
- ◆政府の役割、温情主義的権威
- ◆文化多元主義
- ◆自然との共生、人間の欲望の制御

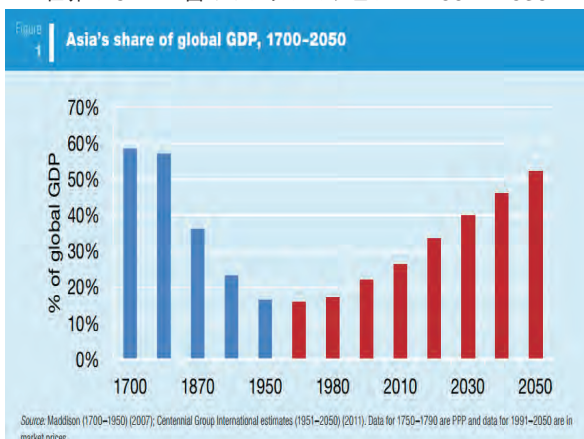
逆にアジアの価値に対する批判とは以下の点が挙げられる。

- ◆個人の自由、人権の軽視
- ◆パターナリズム（父権主義）
- ◆市場メカニズムへの干渉

私たちは何を求めてグローバル社会を生きるのか？ 飽くなき欲望を追求し、働き、資産を増やし、

(表 3)

世界の GDP に占めるアジアのシェア 1700 – 2050



大量消費・大量浪費し、結果的に自然破壊を招くような生き方をするのか。イギリスの経済学者ロバート・スキデルスキーは、「真の良い暮らしとは、健康、安定、尊敬、人格または自己の確立、自然との調和、友情、余暇などによって得られるのではないか」ということを提唱している。こういう考え方は、アジアの価値論につながっており、普遍性が含まれており、人々が多文化社会で共生していくヒントとなっている。

5. 世界のために日本ができること

次のことを普及することが考えられる。

- ◆普遍的価値と基本的人権の維持強化
- ◆国際秩序の保持と改善
- ◆グローバル課題先進国として解決策を提示
- ◆普遍性のあるアジアの価値の普及
- ◆進歩主義に代わる「共存」、「共生」論の展開

民主主義、法の支配、国連憲章、世界人権宣言など、既に確立された国際秩序に対して挑戦しようとしている国々―中国、ロシア、イランなど―に対して日本は他国と協力して、秩序を守るように働きかけていかなくてはならない。

また、日本が世界に取れる国際的イニシアチブとしては、環境の問題、皆保険を含む保健の問題、教育、防災などがある。

『フィナンシャル・タイムズ』のアジア編集長のデイヴィッド・ピリングは、『日本喪失と再起の物語』という著書の中で、「この国は多くの問題を抱えているにもかかわらず、いまだに高い回復能力と適応能力を維持している。歴史上何度も繰り返してきたように、日本はこれらの難題の多くに正面から立ち向かい、最終的には乗り越える力があるはずだ。」と、日本人に対する期待を述べている。

特にここ京都は、アメリカの著名誌により、2年連続で世界一の観光人気都市に選ばれた、素晴らしい都市だ。京都には、自然との調和や、先に述べたアジアのすばらしい価値などがたくさんあるので、世界に、世界の京都としてそういった価値を発信していただきたいと思っている。



トークセッションの概要

1. 赤阪氏の講演を受けて

★青山公三氏

(1) 文化の背景を知る

日本ではクリスマスやハロウィン、国民的イベントとして宗教とは関係なく行われているが、元々は宗教行事であり、意味がある。教会での結婚式や賛美歌なども然り、多文化共生のためには、それぞれの文化の背景を知り、理解する必要があるのではないかと。

(2) 学校教育に議論を取り入れる

アメリカでは、当たり前のように、社会のことを自分で調べ自分の考えを持ち議論する教育が行われているが、日本では学校教育の中で議論をする機会もないし新聞も読まない子どもが多い。授業にもっと議論を取り入れていくべきである。

(3) マスコミの情報を鵜呑みにしない

日本人は他の国に比べて、マスコミから発信される情報を鵜呑みにする傾向が強い。マスコミの情報を常に批判的に見て、自分で正しい情報を得ようと努力することが大切である。

★田村うらら氏

(1) 赤阪氏への質問－国際機関や海外企業で働く日本、あるいはアジアのエリートが発揮できる価値というものはどのようなものか。

●赤阪氏の回答

欧米と比較して、アジア人は、仕事への責任感、誠実性、チームワーク、生真面目さ、自己抑制、他者への思いやりや時間厳守といったところを大切にしている。欧米の行きすぎた個人主義により仕事が円滑に進まないことがある。我々の持っている良さを理解してもらうためには、もっとアジア人が国際機関やグローバル企業で働き、多数派になる必要がある。

(2) 日本人的な多文化共生への道

青山先生の仰るとおり、宗教行事や異文化の慣習の起源を知ること大切であるが、異国の行事も食文化もとりあえず何でも楽しんでしまう節操のなさもまた、日本人の良さでもある。ある意味、日本における多文化共生の道を探るヒントになるのではないか。

2. ミニ講演

「いかにして文化的他者と仲間として共に暮らすか ～人類学者の視点から～」

田村うらら氏

(1) 人類学徒、駆出し教育者として

自分は、欧米での国際経験はなく、いわゆる第三国と呼ばれる国で活動している。国際的なエリ



ートの話ではなく、普通の人たちとの付き合いの中で得た経験を元に多文化交流の社会について考えていきたい。

(2) 人類学とは

人類学とは「他者理解の学」であると言える。人類文化が多様であって、そこに普遍性があることを明らかにしていく学問である。

方法論としては、長期的なフィールドワークが必須であり、「参与観察」つまり「仲間として共に暮らす」ことが柱となっている。カルチャーショックの連続であるが、現場で感じる違和感も重要な考察対象にしてしまう学問である。

(3) 人類学徒として「他者」と関わる

人類学者の誰もが、自分にとっての「当たり前」が根底から揺さぶられる経験をしていると思う。それを経て、「自分も数ある文化のたまたまあるひとつを刷り込まれた存在に過ぎない」ことを知る。(自己の相対化)

(4) ローカル社会にとってのグローバル

～トルコの村を事例に～

私が調査にあたっていたトルコの村では、女性達が絨毯を織りグローバル市場に送り出され、重要な収入源となっている。反対に、冷蔵庫などの家電製品がグローバル社会から流入している。

グローバルとローカルは複雑に絡み合っている。

(5) トルコでの経験

トルコでは、観光地を除けば日本人が珍しく、また日本への関心も高いため好奇心むき出しで様々な質問を投げかけてくる。他者からの自国イメージがいかに滑稽に伝わっているかに気付く。また、親しくなった子どもが日本では火葬が普通だと知り、驚き悲しまれ、ムスリムへの改宗を懇願されたこともある。ひとつの価値体系のなかに育った純粋さに外から対処することの困難さはありつつも、真摯に根気強く相手とやりとりする経験を重ねることとなった。

(6) 「グローバル化」論の偏向と現状

国際競争力強化、英語力向上などが叫ばれがちであるが、それだけではなく、本当に多様な他者を自分の身近に受け入れる心構えはあるのか、またその心構えはどうしたら身につくのか、今後取りこぼしなく考えていかななくてはならない課題である。

(7) 今後の日本の多文化化に向けて

日本国内においても、外国人観光客の増加、地方への波及、高齢化社会に伴う経済移民の増加、難民の受け入れ等、「人のグローバル化」が進行していく時代となり、日本国民も殻に閉じこもっている場合ではなく、多文化社会の先例から冷静に学ばなくてはならない。

(8) 「他者」と共にいかに生きるか

まず、相手の話をじっくりと聞き、こちらからも折れずに話し続ける根気が必要である。

仲間内で共感する「心地よさ」から一歩外へ出て、「違うからこそ面白い」という文化的他者への感受性を持とう。自分を縛っていた「常識」「しがらみ」に気付き、一歩引いて見ることが出来るようになると、何となく感じていたもやもやが解消され楽観的に生きられるようになる。また、そ



れまで目に入っていなかった他者、社会的弱者への気付きや視野の広がりも得られると思う。

3. 総括

★赤阪氏

田村さんの仰ったように、多文化の人と自然体に近い形で無理なく付き合っていくことが重要だと感じる。

★青山氏

国外に出たとき、他者と交わるためには他者を尊重し理解していくことが重要。相手の立場に立てる人材を教育でちゃんと育成していく、育てもらうような教育環境を整えることが重要だと思った。

三大学教養教育のプログラムは、選択肢が広がり、この仕組みが地域に出ていくのは良いことだと思う。学生同士が問題意識を持ち、自分たちで議論するという仕組みが出来ていくと、更に面白い取組になるのではないと思う。

★赤阪氏

グローバル人材には、自分の意見がある、自分に自信があるということが必要。京都には世界に誇れる文化があるのだから、それを自信にして世界に発信していったほしい。

★青山氏

京都府立大学でも取り組んでいる「グローバル人材」という言葉が京都で活発に使われるようになってきているが、京都にはローカルな活動をしながら世界で活躍している企業がたくさんあるので、そういったところで学生が広い視野を持てて、なおかつローカルに貢献できるような人材を育てていこうという取組である。三大学教養教育にもそういう部分でもっと出来ることがあると思う。

★田村氏

若い人々に、他者に対して目と心を開いて、もっと外（世界）に出ようということを伝えたい。

★脇田氏（司会）

グローバル社会をテーマにしたフォーラムはたくさんあるが、グローバル人材をつくるために英語を頑張ろうというようなありきたりな話ではなく、今日の中身は新鮮に受け止めていただいたのではないかと思う。

我々はもう少し世界に心を開くとか、日々の心の持ちようをどうしたら良いとか、倫理観をどう持ったら良いのかとか、人々と共感し合うとはどういうことなんだろうかという、そういう一人一人のレベルで出来そうなことは何なのかということ問いかけるのが大事なんだということが見えてきたのではないかと思う。

4. 府民公開講座を受講して

～アンケート自由記述欄から～

○今まで知らなかった、疑問に思ったことがなかったことが多く、自分の視野や考えが広がったと思いました。他の国の人たちと共存していくために必要な力をつけていこうと感じました。

○グローバルな視点から事実をとらえ、一人一人がより良く生活をしていくために必要な力につい

て赤阪氏の多様なご経験にひきつけられながらお話していただくことができた。

○1つの情報にとらわれず、多種多様、多くの意見、情報を聞き入れた後、自分で何が必要か、何が大切か、何が正しいのかを考えたいので、自分の考えを他者に正しく伝えられるようになりたいと思いました。

正しい情報を選択できる視野を持ちたい。

○アジア的価値観と個人主義の視点の話が興味深かったです。

文部科学省「平成27年度大学間連携共同教育推進事業」

府民公開講座

参加費無料

(事前申込不要・先着200名)

グローバル社会をどう生きるか

— 多文化交流と教養教育 —

京都工芸繊維大学、京都府立大学、京都府立医科大学の三大学は、学生たちにグローバルな時代にふさわしい幅広い教養を身につけてもらうために、教養教育の共同化を推進しています。その目標の一つが、世界の人々の多様な生き方を受け止め、豊かな感性や倫理観を養っていくことです。この府民公開講座では、長年、国際社会の最前線で活躍されている赤阪清隆元国連事務次長をゲストスピーカーに招き、グローバル社会をどう生きていくべきかを、文化の交流や教育のあり方などの観点から考えていきます。



日時 **12月13日(日) 14:00~17:00**

会場 **教養教育共同化施設「稲盛記念会館」
1階 104講義室**

(京都市左京区下鴨半木町1番5 京都府立大学内)

アクセス

- JR京都駅、阪急烏丸駅から 地下鉄烏丸線「北山」下車 1番出口から南へ徒歩7分
- 京阪出町駅 市バス「1」府立大学前下車 徒歩5分
- JR二条駅から 市バス「208」府立大学前下車 徒歩5分



■基調講演

赤坂 清隆氏 (公益財団法人フォーリン・プレスセンター理事長 元国際連合広報担当事務次長)

■トークセッション

赤坂 清隆氏

田村 うらら氏 (金沢大学特任助教)

青山 公三氏 (京都府立大学名誉教授)

脇田 哲志氏 (京都府立大学特任教授)



赤坂 清隆氏

(公益財団法人フォーリン・プレスセンター理事長、元国際連合広報担当事務次長)

1948年大阪府生まれ。京都大学法学部、英国ケンブリッジ大学経済学部卒。1971年に外務省に入省。1997年に地球温暖化防止のための京都議定書の交渉にあたる。2000年に国連日本政府代表部大使。2003年に経済協力開発機構(OECD)事務次長。2007年から5年間、国連広報担当事務次長(広報局長)として、国連の広報強化に努めた。2012年より現職。近著に、「国際機関で見た「世界のエリート」の正体」(中公新書ラクレ)、「世界のエリートは人前で話す力をどう身につけるか」(河出書房新社)がある。



田村 うらら氏

(金沢大学人間社会研究域附属国際文化資源学術センター特任助教)

名古屋生まれ。大学入学より約14年を京都で過ごす。専門は人類学。2003年よりトルコ共和国で調査研究を行なう。2005-2006年、トルコ国立アンカラ大学へ2年間国費留学。京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程単位取得退学。博士(人間・環境学、京都大学)。現在、リーディング大学院「文化資源マネージャー養成プログラム」担当教員。アジア5カ国の大学院生を相手に、研究指導を行なっている。



青山 公三氏

(京都府立大学名誉教授、京都政策研究センター長)

1949年名古屋生まれ。73年名古屋大学工学部建築学科卒。76年地域問題研究所に参画。92年渡米。93年よりInstitute of Public Administration(IPA:ニューヨーク行政研究所)。95年ニューヨーク大学公共政策大学院修。04年Urban Policy Institute of New York(UPIN:ニューヨーク都市政策研究所)を設立。07年日本帰国。08年京都府立大学公共政策学部教授。11年京都政策研究センター長。地域問題研究所理事長(共に現在に至る)。15年京都府立大学名誉教授。龍谷大学政策学研究科教授。



脇田 哲志氏

(京都府立大学特任教授、元NHKアメリカ総局長)

1955年和歌山県生まれ。京都大学法学部卒。1979年にNHK入局。プリンストン大学国際公共政策大学院客員研究員を経て、1998年から中国総局長。2007年からアメリカ総局長。2011年から国際放送局長を歴任し、長年にわたりNHKの国際報道に携わった。現在は、京都光華女子大学教授・短期大学部長(現代アメリカ論、国際ジャーナリズム論)、京都府立大学特任教授(京都三大学教養教育研究・推進機構担当)。

主催／京都三大学教養教育研究・推進機構(京都工芸繊維大学、京都府立大学、京都府立医科大学)

後援／京都府、京都府教育委員会、公益財団法人大学コンソーシアム京都

(問い合わせ先)

京都三大学教養教育研究・推進機構

TEL:075-703-4925 FAX:075-703-4979 E-mail:kyouyou@kpu.ac.jp URL:http://kyoto3univ.jp/